
リプレイ

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リプレイ

【Zコード】

N6441A

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

怒った拍子に瞳が赤くなってしまう少年。その少年の前に突如現れた天使…。『生まれ変わつたら何になりたい?』果たして少年が望んだものとは…?——この小説が気に入ってくれた方は『チョメリップ』をご覧下さい。続編が書いてあります。

第1話～赤い目～

「 いにしへ」

不意に後ろから声をかけられ反動的にビクついた心臓。

「あなたに会つて、木ノ下 譲（きのした ゆかる）君

『あ…はー』

振り返ると田の前には、同じ年ぐらいで身長は低め、色白で大きな瞳、ストレーの長髪でこの辺りや見ない制服を着てこる。なんと可愛らしい女の子が微笑んでいた。

「 いにしへ」

『あ…あの、なんですか？』

警戒心むせだしで返事する。

「 もう、あこがれたらあこがれるのが基本ですよ。」

『あ…すこません』

注意されるとすぐ謝りてしまつのも今ではもう慣れてしまつた。

「ふふつ[冗談よ。それにしても尊通りの田君ね」

何を言つてゐるのか状況がつかめない。尊通り…？

『あ…あの今から学校なんで失礼します』

人と会話が苦手な俺は、この場を逃れようとして歩き始める。

「学校ね…屋上で授業をサボるために行くの？」

自然と止まる足。

『な…』

「なんで知ってるんだ！？」

今言おうとしていたコトをそのまま言われてしまった。恥ずかに少し慌ててしまう。

「まあ、こんな所じゃなんだし… フア ミレスでも行きましょ？」

手を引つ張られ連れてかれよつとするが俺は無理矢理踏み止まる。

『…触るな…』

「あらあら…こつや大変そうな仕事だわ」

ため息をつく女の子。

仕事とは一体何なのか、その娘への疑いは増すばかりだ。

「もつとゆっくりした所で話したかったけど、いいでいいわ」

彼女は話始める。

「まず、私の名前はこもり小森あい愛。…と言つのも人間界の別名で、本当の名前はエン・リューファって言つた。讓君からしたら初めましてね」

「あいあい…、何言い出すんだこいつ…。人間界？」

「人間から見れば、天使つてどこかしらね…」

ふざけてるのだろうか、俺は天使などという人間の架空上でしか存在しないものは認めない主義だ。

「神様からの使いでね…あなた、讓君を助けに来たの」

「あ…ぐだらねえ。」

俺は話の途中で歩き始める。

「信じてないみたいね。：まあ、無理もないけど

『当たり前だろ！いい加減にしろー。』

「口が悪くなってる！あんまり興奮するとまた目が…

『…………くつー。』

俺の目は真っ赤になっていた。決して充血しているとかではなく、瞳が赤くなるのだ。

『…………くつ…』

俺はすでに見られてしまっているが、慌てて前髪で両目を隠した。

「いつもせうやつって伸び放題の髪で目を隠す。友達にも反抗できない。興奮した拍子に目が赤くなったら気味悪いって思われる」

俺の本心を綺麗に並べる愛と名乗る女。

「だからいつも一人ぼっち。人と関わらない様にしているのね

愛はそらに続ける。

「あなたがそれに気が付いたのは小学三年生の頃… 親友だと思つてい

た人に裏切られた』

『……ひつ』

「それ以来人が苦手になり、誰にも言えない秘密を隠してきた」

『……めりつ…』

「恋人どころか友達もいない。両親も三才の時に事故で他界して親戚の家をたらい回し。今となつては施設とはね」

『やめりよーつ…』

もはや俺の目は真つ赤であるだろ!づ。

「天界から見させてもらつたわ」

『だからそんな話信じられるわけ……つー…』

愛の背中に大きな…羽の様な物が見える。

『うわあ…』

「信じた?」

愛の背中には片側直径2メートルの羽が両肩についていた。

服の中に隠すのは不可能。仮に隠したとしても制服の背中が大きく膨らむはず。

『……な？……はあ？』

あまりの突然に俺は言葉を失ってしまった。

「大丈夫。私の姿が見えるのは譲君だけよ」

先ほどから通り掛かる人の視線が気になっていた。こんな昼間から制服を来た男女が一人話しているからだと思っていたが…

「つ、ま、り、周りの人から見れば今までの会話はあなたの独り言

「

クスッと微笑む愛。

俺は恥ずかしさのあまり、目だけじゃなく顔まで赤くなってしまった。

『……じゃあその制服は何だよ…』

「これはサービスよ。第一、こんな格好しないと話聞いてくれないでしょ！」

するとフツと風が吹いたかと思えば愛わ白い布の様な服を着た姿になっていた。それは普段人間が想像している天使の姿そのものであり、エン・リューファの本当の姿だった。

』……で、その天使が何しにきたんだよ』

「だから言つてるでしょ。あなたを助けに来たつて。……赤い目を持つなんて……どの世界でも嫌われるんだから……」

急に遠い目になつた愛。

何が助けに来ただ。

何が赤い目はどこでも嫌われるだ。

急に悲しそうな顔しやがつて。

あんたの目だつて赤いじゃないか。

第一話～身勝手～

『お、おー…その田』

「…あ…」

愛は慌てて人間の姿に戻り、作り笑顔で微笑む。

「見られちゃったね…譲君は怒りの感情が溢れると、私は悲しみの感情が溢れると赤くなるの…」

『…そうか』

「…つて、私はこんな事言いに来たんじゃなくて……なに笑つてんのよ」

いつの間にか俺は笑っていたようだ。

『別に、ただ嬉しくって』

「…嬉しい？」

『ああ、今まで辛かつた。あんただつてそまだり？天使だらうと人間だらうと…一人は淋しいよな』

「そうね、だから私はあなたを助けに…」

『あなたが俺を助けたらどうなる？俺は救われるのか？一人じゃなくなるのか？』

「そうさせじみせる……！」

『あんたは……？』

「……え？」

『天界に帰るのか？』

「もちろん。仕事が終われば私の役目は終わる。譲君の私に関する記憶も消させてもらいうわ」

『それじゃあんたは救われない。あんたはこの仕事が終わればまた一人になっちゃまう』

俺の言葉に愛は呆氣をとつていている。

「……フフ、珍しい人間ね。大丈夫。譲君より不幸な人はまだたくさんいるの。次の仕事が始まれば……」

『いつ終わる……？』

「だから、譲君が救われれば……」

『そうじゃない。あんたの悲しみわいつ終わるんだ？』

「終わらなくても……仕事だから……」

『

愛の目はまた赤くなっていたが、俺はあえて触れなかつた。

『せうか…、じゃあそらの仕事とこいつの内容を聞いひつか』

「うん。 まづ、譲君には生まれ変わつてもいいわ」

『生まれ変わる…。』

「ええ、一度くらこ何かになつたに。つて思つたコトくらこあるでしょ?」

そりゃあ、鳥になつて飛びたい…とか、まあ思つた事はある。

『記憶はどつなる?俺は昔人間だつた…なんて記憶は残るのか?』

「最初は残るわ。シロミノースコーン期間は一週間。それで生涯この姿で生きると決めたら、譲君の人間としての記憶は消える。嫌ならまた変わる。でも、同じ物に一回なれないから気をつけてね」

『なるほど…。』

「たとえシロミノースコーン期間でもその間に命を絶つかもしれないからね」

『あなたはその間どうする?』

愛は少し黙る。

「そのあんたってのはやめなさい。愛って呼んでよね

『…分かつた。愛はどこにいる?』

「天界から譲君を見守ってるわ。譲君がきてほしいタイミングでまた現れる」

大体話はつかめたな。

用は俺にとって、今のこの生活を変えるチャンスなんだ。

「ああ、何になりたいか考えておいて。三日後の三時にまたこの場所で会いましょう」

愛はそう言って残すと空高く飛んでいった。

残された俺はまだその場に立ち尽くした。頭の中わ何になるかよりも、今起きた事態が夢じゃないか確認する。

なんか今日は色々あったな。

辺りは日も沈み、うつすら暗くなっていた。

『今日はもう寝るか』

俺は家…といつも施設に帰り、部屋で眠りについた。

-----。

朝、目が覚めると時計の針は信じ難い事になつていていた。

何にならう…

そう考えただけで悩み、あまり眠れなかつた。

『もう…人間は嫌だな』

人間は嘘をつく。自分が有利な様に。

それに身勝手だ。信用の場所がない。

信じれば利用される人間はもうゴメンだ。

動物になろうか…。

動物は自由だ。学校も仕事もない。群れを作るが、人間とは違う協力性を感じる。

『あ…しまった。肝心な事を聞くのを忘れた』

俺が聞き忘れた事…それは生まれ変わつても目は赤くなつてしまつのかだ…。それが分からなくては、生物に生まれ変わるのは考えものだ。

『まあ、今度でいいか』

～三田後～

「こんばんは」

『ウツス、時間通りだな』

「フフフ、今回はあこせつしててくれたね

『まあ、愛には世話をになりそうだしな』

仲間…と呼べるのが天使だつていい。ただ、愛と話すのが楽しみだつた…なんて口が裂けても言えないな。

「じゃあ改めて聞くね…何になりたい?」

『その前に一つ…俺の田舎じみなんかな?』

「…それは分からぬ」

予想外の答えが返ってきた。

『ちよつと待てよー前の仕事で俺みたいな奴はいなかつたのか?』

「…いたわよ

…あ、愛の田が赤くなってる?』

『じゃあ、そいつはどうなった?』

「聞いたやいけないと思つたけど、聞かずにはいられなかつた。」

「死んだ。正確には、殺した」

『…なぜ?』

「譲君はラッキーなの。赤い目を持つ人間は殺さなくてはならないのが天界の決まり。でも、これからは生まれ変わればどうか? って事になつたの」

つまり、俺は神様の実験台つてわけか。それになんか…天使つて悪魔みたいだな。そりやそつか、天使のイメージは俺達が勝手に作つたものなんだからな。

「…まあ、どうする?」

俺は深く息を吸い込んだ。

『…鳥になりたい』

「分かつた」

愛があきらかに日本語でも外来語でもない言葉を放つ。おれひくこれが呪文というやつだろう。

愛が両手を俺の方に向けると、田も眩む程まぶしい光に包まれた。

『…う』

別に痛みなどはない。ただ、不思議な気持ち。

フツと体が楽になった。ギリギリで田を開くと俺の体が田の前にあり、徐々に体から離れ、俺は意識を失った。

-----。

田を開くと田の前は真っ青に白い雲…」には空だ。

『飛んでる…スゲエ…』

「どう? 一週間以内に答えを出してね。じゃなことずっとこのままの姿になるからね。それから、死ないよう!」

『分かった。しばらく慣れるために飛んでみるよ』

黒い翼、黒い体。しゃべりつと声を出すとカアーといつ泣き声。俺はカラスになつてゐる。

これでもう俺は人間ではないし、人間としゃべる事もできなくなつた。

愛は天使だからきっと言葉が通じたんだな。

『おおー、なんか気持ちいいなあ。ハハハ、人間があんなにちっち
やいや』

するとカラスの群れがやってきた。俺もそこに加わる事にした。

そつか、食べ物を取りに行くんだな……って、ゴミ箱―――?

集団は家庭ゴミを出す場所に群がり、食べ物を探している。

『こなん食べるのか?』

ぐちゃぐちゃになった家庭ゴミ。なんとか食べられそうな物は…

「バササツ」

何を思ったか、一斉に逃げ出すカラス達。俺は訳も分からずア然と
していた。

が、次の瞬間：

「ドゴツ！――

鈍い音と共に激しい痛みが頭に走る。

……ほつき、……人間？

「またこのカラス共はゴミ荒らして！」

薄れゆく意識の中で覚えているのは人間にほつきで殴られた事。

そつか……。忘れてたぜ……。

人間は身勝手なんだ……。

人間わ動物を平氣で殺しているが罪に問われない奴がほとんどだ。

大袈裟な話、悪人を裁くものだつて……動物からすれば罪人なんだ。

動物の肉を食つてるからだ。

なのに、人間わ【生きるためだ】だからしじうがないって言うんだ。

今、人間を客観視して分かつた。

動物は人間に逆らえない。

たとえ……生きるためでも……

許されないので。

『う…あ…』

まだ…生きてる。助かるか…？

「ホント氣味悪いカラスだ」と…！」

ほつきを手に持ったおばちゃんが俺に制裁を食らわした後、散つた『ハハ』の片付けをする。

「おーい、カラスが道端で死んでるぞおー！」

「あ…生きてる…殺せ殺せ…！」

くそ、近所の餓鬼どもか…。死にかけた俺をエアガンで狙っている。

ちくしょう、もうダメか？

なぜ助けない…？

俺がカラスだからか…？

人間じゃないからか…？

これじゃあ何も変わってないじゃん。

人間は…身勝手だ…。

最終話～リプレイ～

「……る！……譲！……」

誰かに呼ばれてる……？

この声は……愛か……。

『う……あれ？俺どうなったんだっけ？』

確か……そうだ、俺はカラスになつて人間に殺されかけたんだった。

『俺……生きてる？』

「当たり前でしょ」

『でも、シユミレー・ション期間でも死ぬつて

「あんなの嘘よ。ああいう言い方しないと無茶する人がいるかもしれないからね……」

よかつた。とりあえず生きてる。姿は、人間に戻ったのか。ここは施設の俺の部屋か。

「大変だつたわね……どうする？また何かに生まれ変わりたい？」

『なんでだろ？……』

「…え？」

『なんで人間は動物をいじめるんかな…？』

「…いじめているわけじゃない。生きているだけよ」

『でも動物は生きるために逆らつコトは許されない』

もし…もし仮に、人間より遙かに身勝手な新生物が現れ、この世を支配したら…俺らはどうなるのかな…？

平氣で殺され、逆らつコトもできない。

そんな事つて…酷いよ。

酷い…？

違う…！

これは…俺達人間が動物にしている事じゃないか。

俺だつて身勝手だつたんだ。

『……愛。何にでも生まれ変われるのか……？』

「意志があるものならね」

『じゃあ、俺が神になる。この世界を……変える』

「それはできないわ」

『……な、なぜ……？』

「神様は絶対なの。そもそも生まれ変わる時に神様に頼むの。そんなの無理に決まってるでしょ？……それに神様が一人いたらどうなると思う？意見の違う絶対がぶつかれば世界が滅びるかもしれないのよ」

愛の呪文の様なものは神様との通信だったのか。

しかし、困ったなあ。他になりたいものもないし。

いや、なりたいけど……人間を敵に回すのが怖い。

『時間はどれくらいある？少し考えたい』

「シユミレーション期間が終わってから一週間よ」

『あと一週間か』

「いえ…明日までよ」

『…え？』

「あなたは六日間気を失つてたわ。それにしても、こここの施設の人間はたいしたものね。譲君が六日も起きないのに心配のひとつもないんだから」

『ハハっ、それは普段俺が無愛想だからいいんだよ』

さう困ってしまった。明日の三時までに決めなくちゃいけないのか。

今は昼の三時が、あとちょうど一十四時間後…か。

『分かった。じゃあ、また明日な』

「うん。また…」

そう言い残して愛は天界に帰つていく。

部屋の周りを見回せば、見舞いの花が花瓶に飾られていた。

スーパーなんかではなく、花屋専門店で売っているような綺麗な花。見るだけで心が洗われる様だ。

誰がこんな事をしたんだろう。俺を心配してくれる人なんかいないし、愛はターゲット以外の人間からは見えないはず。

まあ、いいか… そういえば、愛の日は黒かったなあ。

俺が気を失つても悲しくなかつたの… かなあ…。

「次の日」

「今日は学校に行こいつ」

俺は学校へ行つた。… とは言つても向かつのは屋上。

もしかしたら今日が最後の学校になるかも知れない。
朝、遅刻寸前で校舎に入る。… すると

「オッス！ 譲。お前最近休みがちだな。単位どれねえぞ！」

確か… 同じクラスの岩嶋 彰吾（いわしま しょうご）だったな。

『あ… ああ。気をつけるよ』

「おこおこ… 行くんだ？ 教室はこいつだぞ」

あう… 屋上行こうとしたの…

無理矢理のようすに彰吾に連れられ、教室に入る。

「オッス！」

「おう、彰吾……あれ？ 確か……譲？」

彰吾の友達か…。なんか苦手なんだよなあ。

彰吾はクラスのムードメーカーでいつも明るく面白い。女の子にも人気だ。

「いやよお、もうそろそろ俺ら高校二年だろ？ 最後くらいみんなで仲良くしようってなつてな」

彰吾らしい…いい奴だなあ。俺がもつと素直だつたらこいつと親友になれたかもなあ。

「それからな、あと一人来てない奴がいるんだけど、今日来るかなあ？」

「それ、さわだ沢田 だいき大樹だろ？ あいつ留年確定だから辞めたつて話聞いたぜ」

「うーん…でも昨日大樹に電話したんだけどおーあいつクラスに入る時とテンションが違うつづーか、明るい奴だつたぜ？」

「はあ？ 僕大樹が笑つてるとこなんて見たコトないぜ？」

よく分かんないけど、大樹も俺と同じで来てなかつたみたいだな。

「……あ、おいーどこ行くんだ譲？」

「うそりと教室を逃げようとした所を草薙に見つかってしまう。

『ゴメン彰吾。気分悪いから保健室行つてくる』

「そ、そうか。病み上がりなんだから無理するなよ」

しかし、せりん気分が悪いなんて嘘た
屋上に向かう

ガチャ

あれ、先客がいる。まいっただなあ。

「うわあ！」

いや、何もそこまで驚かなくても…って、こいつ…目が赤い？

一
あ
あ
あ
「

『あ…え？と…その三…』

「あ…お願い！誰にも言わないで…」

こつも俺や愛と同じ…？

『君は…?』

「あ…ってゆうか君、譲君だよね?僕、同じクラスの沢田大樹って言つんだ」

『君が!?』

「あれ?知つてるの?」

『さつき教室で君の話を聞いたよ』

「僕の?あ、彰吾君か」

『ああ。せっかく来たのに教室行かないのか?』

「だつて目が……譲君はあまり驚かないね」

『まあな』

なんせ俺本人も目が赤くなるからな。

「僕ね…本当はみんなと仲良くしたいんだ。でも…臆病だから…目が赤くなっちゃうの…」

大樹わ恐怖心で目が赤くなるのか…。

『俺も怒ると目が赤くなるんだ』

「… そうなの？」

『今… 天使って奴に生まれ変われるって言われて… どうしようかって悩んで屋上に来たんだ』

「それ… 愛ちゃんって女の子でしょ」

『知ってるのか?』

「一週間前… 僕のところにも来たんだ。制服姿でね。ついていくと譲君が倒れて…」

『こいつが看病してくれたのか…。』

花瓶の花もこいつがやつてくれたのかな?』

『お前… いや、 大樹も生まれ変わるのか?』

「うん。 最初、 猫になつたんだけど… 人間には勝てなくて…」

『俺なんかカラスだぜ?』

ハハツと二人で笑う。大樹は笑顔が似合う。

「僕の目が初めて赤くなつたのは中学一年生の頃でね、 友達もいっぱい居た。それで… 好きな子に告白しようとしたけど… 自信がなかつた。彼女わ悲鳴をあげた。僕の目を見て……。何が何だか分から

なくて……

『大樹……』

「だから昨日彰吾君から電話あつた時、嬉しかつた。たくさん話しあんだ。だつて……電話なら……顔見られないから……でもやっぱり教室行く自信がなくて……屋上に来たんだ」

だからわつとき目が赤かつたのか。

『なんで俺達……みんなと違うんだろうな……』

「生まれ変わるチャンスなのに……ダメだね……僕たち」

長い沈黙が続く冬の空の下。

この時期、木は寒そだなあ。葉っぱも枯れてるし、自分じや動けないもんなあ。

この時期、虫達は暇そだなあ。寒さを凌ぐために土の中につつといるんだから。

そう考へると人間つていいのかもな。

いや、ズルイんだ。

暑かつたらクーラーもあるし、冷たくておいしいアイスクリームや素麺、プール。

寒かつたら暖かい暖房や鍋。

でも、人間が欲を満たす度に犠牲になる森林や動物。

いつから人間にそんな権利ができたのだろうか？

「譲君…僕達にも幸せ…つてあるのかな？」

『…あるさ。まず、生きている事…。これが一番幸せじゃないか？別に今まではいつ死んでも構わなかつた。でも、カラスになつた時、死にかけて…生きてた時は本当に嬉しかつた。』

目指している幸せは同じでも…たどり着く幸せの場所は人それぞれだろ？

それに今日、七年ぶりに…人間の友達ができた』

「ありがとう…譲君」

『礼を言つのはこっちの方だぜ…大樹…』

「…ねえ、教室行つてみない？」

今このこの気持ちなら行ける。それは俺も大樹も同じだった。

『…よし!行くか!…』

時間的に昼休みだな…。

もういいんだ。俺らは一人じゃない。俺も譲も…これでダメだつたら愛に頼んで人間以外の生き物になれるからつてゆづからじやない。

人間である限り…人間として生きたい！

ここでまた逃げたら…俺達は本当にダメになつてしまつ。だから…

「ガラツー

静まり返る教室。集まる冷たい視線。

「譲！大樹！来ててくれたのか」

周りの反応などお構いなしに駆け寄る彰吾。こいつは本当にいい奴なのだ。

すると、彰吾の友達が俺らに向かつてこいつを睨つ。

「あいつら…いまさら何しにきたんだよ」

「マジ…キモいんだよ」

「おい、何言つてんだよお前…う？」

彰吾が友達を叱る間もなく、俺の拳が炸裂していた。

『悪いな…人間が身勝手な生き物だつてのは俺達が一番知つてゐる。だから…俺達はそういう奴らを許さねえ』

はあ…やつちまつたか…。もつ俺の目は真つ赤、…あれ?

「譲君…目、黒いよ…?」

『大樹…あれだけ言われたのに…自信なくなつただろうに…目…黒いぞ』

俺達は顔を合わせると教室を飛び出した。

向かう先はもちろん愛と待ち合わせのあの場所だ。

『愛ーー!出でーー!』

「愛ちゃんーー?」

「はいはい。見てたわよ。二人共、よく頑張ったわね」

『愛ーーなんで…急に俺達は?』

「調べたら分かつたわ。そもそも譲君達は極度なトラウマを受けたがためになつてしまつたの」

『俺は…親友に裏切られた怒り…』

「僕は…好きな人に告白できなかつた…恐怖心…」

「だから、治すにはそれと同じくらいの大きさで、逆の感情を持って
ばよかつたの。

譲君、あなたは大樹君に優しくしてあげれた。

大樹君、あなたは譲君のおかげで自信が持てた

『確かに…俺…あんな人に話したの…久しぶりだ』

「僕も…」

「そして…私の悲しみの反対は、喜び。
実は昨日から治つてたの。

あなた達の行動がうれしかった。譲君は初めて会つた私を本気で心
配してくれた。大樹君は私一人じゃ負えない譲君の看病を手伝つて
くれた

『じゃあ…俺達…これから…』

「普通の高校生…？」

「クリと愛が頷く。

「『やつたあ…！』」

「それじゃ…私の仕事は終わつたから…か、かえら…な…きや…」

別れを惜しんだのか、突然愛が泣き出してしまつた。

『愛……泣くなよ。お前が来てくれて良かつたぜ』

「やつだよ愛ひやん。それに……泣いたらまた田が赤くなっちゃうよ」

「だつて……私……」こんなに優しくされたの……初めてなんだもん……』

『それはお互い様だる』

「……あー! 譲君……彰吾君達が……」

もうひとりへ元休みは過ぎてこるとこのひ、章吾が俺が殴つてしまつた奴らを連れてきた。

『譲……大樹……やつ君は『メンな』

『お前達にあんな勇氣あつたなんてな……』

『さあ、午後の授業始まるぞ! 行こうぜ! ……』

『大樹……学校辞めんなよーまだ間に合つからな……』

『みんな……大樹! 行くか! ……』

『うふーーー!』

校舎に戻りつとある時、俺と大樹は声をそろえて大きな声で「うふーーー」と笑つた。

「『愛』……ありがとなあ……お前も頑張れよお……』

「……愛？ いきなり何言つてんだ？」

「『別にいゝ……ただの……一人言』

「なんだそれえ～ハハハツ」

俺達は確かに生まれ変わったよ。……だから、今までの生き方をリップ
レイするんだ。やり直すんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441a/>

リプレイ

2010年10月15日17時09分発行